=市史編さん便り=　【6号】 令和5年5月8日(月)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

『ビキニデーin 高知2023』の土佐清水市のフィールドワーク

「足摺岬沖海上クルーズ」

「中浜万次郎生家＆納屋見学」

「第132震洋隊越基地震洋艇格納壕見学」を実施！！

5月5日～7日まで「ビキニデーin 高知2023」が高知市や四万十市、土佐清水市を会場に開催された。このうち土佐清水市では、5月5日午後より足摺岬伊佐漁港から出航し、足摺岬沖クルージングを実施。ホテル足摺園に宿泊後、翌日6日午前中に足摺岬(展望台・中浜万次郎像)、中浜(中浜万次郎復元生家・たけまさ商店節納屋見学)、小江(第132震洋隊基地・震洋特攻艇格納壕見学)のフィールドワークを実施した。

6日午前中のフィールドワークについては、「ビキニデーin 高知2023」実行委員会・松繁美和委員長からの依頼があり、土佐清水市教育委員会岡﨑哲也教育長の指示のもと、生涯学習課市史編さん室・田村公利が、公務としてガイドを務めた。

↑中浜地区に所在する「たけまさ商店」の節納屋で宗田節製法と、設備の説明を受ける参加者。

ガイドを行うにあたりお二人の方々から強いアプローチをいただいた。一人は、元清水中学校教諭・今城隆さんである。今城さんは、理科の専門教員であり、優しい中にも一本芯のある筋の通った先輩教員だった。現職中はたくさんの声かけや激励、アドバイスをいただくことができた。令和3年度に市史編集委員で戦争遺跡を担当されている出原恵三編集委員に誘われて、同編集委員・武藤清氏と二人で鵜来島の戦争遺跡整備と調査に参加したときに、今城隆さんも参加しており、そのときに久々にご挨拶したことであった。

今一人は、ビキニ核被災検証会太平洋核被災支援センター山下正寿事務局長である。私事、長男が清水高校生のときに、「幡多ゼミ」に参加しており、東日本大震災の現地学習で宮城県を訪れたときに大変お世話になった。高校卒業後、長男は岡山理科大学、その後に岡山大学大学院に進学し、岡山県内で現在働いている。こうした様々なご縁が今回のガイドにつながっている。今回のガイドで、ご恩を少しでもお返しできたとしたら嬉しい。

↑中浜万次郎生家の説明を行う西川英二区長(左)、震洋艇格納壕の説明を行う田村(右)。

江戸時代から明治中頃までは、櫓漕ぎと帆船のカツオ船であり、地先の沖合でカツオを待って獲るカツオ漁であった。明治末から大正・昭和初めに動力船が徐々に導入され、保冷技術が確立されてからは、カツオを追い求める時代になった。遠洋漁業が華やかなりし時代の到来である。

戦後、互いに戦勝国となった米・ソ二大国は核の保有により、世界の覇権を争った。東西冷戦時代の幕開けである。米ソ英仏はこぞって太平洋上などで核実験を重ねた。ビキニ環礁における核実験もその一つである。このビキニ環礁における核実験の閃光やキノコ雲を土佐清水市出身のマグロ船やカツオ船で漁業に従事していた複数の方々が目撃している。その意味からも、土佐清水市とビキニ環礁での核実験はつながっている史実だと私は捉えている。そのことをご教示いただいたのは、中学校時代の恩師・上岡真智子先生であった。僅かな頁数ではあるが、今回の『新・土佐清水市史』にも、このことについて触れさせていただいていることを申し添えたい。

今回のフィールドワークでは、中浜万次郎生家の見学では西川英二区長に、納屋見学では「たけまさ商店」ご主人と奥様にご協力いただいた。御礼申し上げたい。また、第132震洋隊基地の格納壕の説明の際には、若い学生の方から「マル四」と「震洋」との違いについての質問を受けた。「自分で調べてみてください」と敢えて冷たく突き放す対応をさせていただいた。「調べ学習」や「研究」は、答を初めから他者に聴くのではなく、自分が苦労して答を探っていくことと私は考える。高知大学大学院修士課程で地理教育を学んでいたとき、師匠岡田俊裕教授(地理学史専門)は、簡単に答を教えてくださることは決してなかった。今から考えると、それが「研究の基本」であろう。その後、私は師の指導を魂魄に留め、中学校社会科教員として、「社会科・調べ学習」の指導を展開してきた。

話は変わるが、最近、郷土史研究者を自称する方々の中には、自分が調べるわけでもなく、図書館職員さんに一々事細かく調べてもらい、それに自己満足している人を見かけることがある。「研究」の意味と本質をもう一度考えていきたいものである。